

日本精神保健社会学会

平成 24 年 12 月 15 日

THE JAPAN ASSOCIATION OF

事務局：東京都豊島区西池袋 2-39-8

MENTAL HEALTH SOCIOLOGY

ローズベイ池袋ビル 3F

<日本学術会議学術研究団体 No.1001>

東京メンタルヘルス株式会社内

TEL 03-3986-3220 FAX 03-3986-3240

ニュースレター第 47 号

発行人：宗像恒次

編集人：上田敏子、窪田辰政

第 18 回日本精神保健社会学会学術大会を終えて

第 18 回学術大会実行委員長

岡山県立大学保健福祉学部教授 香川幸次郎

2012 年 10 月 20 日東京医科歯科大学湯島キャンパスにおいて、「自己肯定を支える社会」の大会スローガンのもと、多く方々の参加を頂き大会を開催することが出来ました。ここに改めてお礼申し上げます。

本大会は午前の部で一般演題を、午後の部でシンポジウムを開催しました。一般演題は 6 題の発表があり「SAT カウンセリングシートを活用した大学生のためのストレスマネジメント教育の試み」「大学生における不安気質の発現認知別にみたソーシャルサポート認知に関する研究」「看護短期大学生を対象としたレジリエンスプログラム要件の研究」「自己肯定感をめぐって一ひきこもる青年の居場所から一」「東京電力福島第一原発からの距離別・気質別にみた不安と不眠一第 1 報一」が報告されました。

各演題ともこれまで本大会で発表された研究を引き継ぎ、新たな視点から研究を深化したものでありました。特に「自己肯定感をめぐって一ひきこもる青年の居場所から一」を発表されました NPO 法人道草の家の和田ミトリさんは、自らの取り組んでおられる実践をもとに、集いに参加する青年たちの心情をご報告いただきました。

「中学陸上部のハードル能力を向上させる心理教育指導の試み」は静岡産業大学の学生の方が、中学校の陸上競技部員を対象とした実践をもとに、心理教育指導の効果について報告されました。事例数が少ないため、その結果は今後より確かなものとする必要がありますが、学生の方が本研究大会で発表していただいたことは、研究の幅を広げるものであり、今後の研究に大いに期待したいものです。

本学会では、東京電力福島第一原発の事故による放射能の社会心理的影響に焦点を絞り、福島県に在住する住民の方々のストレスとメンタルヘルス調査を実施し、効果的な対策を社会学的な視点から提言するとともに、効果的なメンタルヘルス支援を提案することを目

的としてとして調査委員会を発足し取り組んでいます。「東京電力福島第一原発からの距離別・気質別にみた不安と不眠―第1報―」はその一部を報告したものであり、今後継続した調査と支援が望まれます。

シンポジウムは「自己肯定を支える社会」のテーマのもと、シンポジストとして池内玲子氏（NOP 法人東京メンタルヘルス・スクエア認定カウンセラー）、熟田桐子氏（TMA 認定カウンセラー、NNR 認定結婚カウンセラー）と本学会の会長である宗像恒次氏の三者から基調報告を頂きました。

池内氏からは『知的障害児、発達障害児から学ぶ、自己肯定できる社会』と題し、知的障害を持つ娘を育てる中から、自己肯定感を高めることができた自分を語っていただきました。子育てに自己肯定感が重要であること、すべての子どもが自己肯定感を持てる社会の実現を、そして他者の尊重と自己肯定は表裏一体であると述べられました。

熟田氏は「トランスジェンダーを生きて・・・性同一性障害の当事者から見た社会の生き辛さ～仕事、恋愛、自殺」と題し、自己のこれまでに生きてきた軌跡と体験を語っていただきました。こうした実体験をもとに、仕事や自殺、恋愛について触れていただき、自殺については、典型的な性役割とは異なる行動をとることや同性への性指向を持つことによるいじめ、孤立感や思春期に日々変化していく身体への違和について語られました。また恋愛については、失恋による性同一性障害であるという現実を突きつけられたこと、偏見や誤ったイメージ、生きている実感の欠如や将来への絶望感について述べていただきました。しかしこうした語りと裏腹に、言葉の端端に今の自分を受け入れ、力みのない自己肯定感がにじみ出ているのを感じたのは、私一人だけではないと思いました。

宗像氏は「自己肯定を支える社会づくり」と題し、高校生の自己イメージに関する国際比較結果から、諸外国と比較して我が国の高校生の自己評価が非常に低いことに触れ、この原因を民族遺伝学研究に基づき解説し、日本人が民族的に世界で1番不安遺伝子を有する割合が高いこと（約80%）を指摘された。また、自己肯定感を低下させる行動特徴として、対人依存型行動特性や自己抑制型行動特性が欧米と比較して高いことに触れ、その原因の一つに不安遺伝子があるため最悪を避けるため最悪の親の表情を記憶しやすいために「親の記憶の歪む」ことを指摘し、SAT 養育者顔表象再脚本化法の有効性について述べた。本法は企業の研修にも用いられ、自己表現型への変化が認められ、メンタルヘルスに有用であることが披露された。

以上本大会の概要について述べてきましたが、社会的排除が顕在化している今日にあって、一般演題やシンポジウムを通じて「自己肯定を支える社会」についての議論が大いに深められ、参加していただいた方々に少なからずお役に立てたものと自負しています。また懇親会の席においても活発な会話が交わされ、次回の大会での再会を誓いました。最後になりましたが、本大会開催にあたり会場の手配等お世話を頂きました東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科の遠藤慶子先生に心よりお礼申し上げます。

第 19 回日本精神保健社会学会学術大会・総会のお知らせ（第 1 報）

開催日 平成 24 年 11 月 3 日（土）（会場は都内を予定）

第 17 回学術大会に参加して

学術大会参加者 渡部 洋子

平成 24 年 10 月 20 日(土)、日本精神保健社会学会第 18 回学術大会が東京医科歯科大学湯島キャンパスで開催された。

第 1 部では、一般演題 6 題の発表があった。その中でも興味深かったのは、大学生の眞鍋氏らによる「中学陸上部員のハードル能力を向上させる心理教育指導の試み」であり、自分の考えをしっかりと持ち、スライドや動画を用いて、介入前、介入後のハードリング成功事例をわかりやすく、自信を持って発表されていた。スモールステップでの成功体験が参考になり、何事にも臆せず挑戦することの素晴らしさを実感しました。

滝澤氏らによる「東京電力福島第一原発からの距離別・気質別に見た不安と不眠」第 1 報では、福島原発に近いエリアにおいて「不安と不眠」、P T S D 得点が有意傾向で高いという結果から、「地域の特性に応じた効果的な支援策を提案していきたい」という報告があった。今後、白河、南会津の調査を行なう予定であると伺い、地域の特性に応じた効果的な支援策を期待している。

第 2 部では、シンポジウム「自己肯定を支える社会」では、池内玲子氏の「知的障害児、発達障害児から学ぶ、自己肯定できる社会」では、社会の中で、親子共に成長していくプロセスが大変参考になった。

熟田桐子氏の「トランスジェンダーを生きて…性同一障害当事者からみた社会の生き方辛さ～仕事、恋愛、自殺」の体験談があり、大変参考になった。盛況な会場からの活発な議論も印象深かった。

懇親会では、会場からみえるスカイツリーがライトアップされているのが美しく、シンポジストの方々とも身近に会話をできて、楽しいひと時を過ごしました。

機関誌「メンタルヘルスの社会学 Vol.19」の原稿募集

年報編集委員会では、会員の皆様からの原著論文を募集しております。また、総説、研究報告、実践報告、短報、研究ノート、資料等もお待ちしております。論文の書式は年報の執筆要項をご覧ください。今年度の原稿締切は 7 月末 となります。お間違いのないようご注意ください。なお、タイトル、抄録の英文についてはネイティブチェック（専門校閲）を必ず受けるようお願いします。

●送付先 東京都豊島区西池袋 2-39-8 ローゼンビル 3F

東京メンタルヘルス株式会社内 日本精神保健社会学会事務局

●送付方法 電子メールの場合：jamhs1993@yahoo.co.jp（テキストまたはワードの添付）

FD または CD-ROM の場合：郵送にて（DOS・V フォーマット）

学会調査レポート

日本精神保健社会学会福島第一原発住民精神健康調査委員会

いわき市久之浜地区調査レポート

上田敏子¹⁾、滝澤武²⁾、窪田辰政³⁾、畠中宗一⁴⁾、新行内勝善⁵⁾、
村上章子⁵⁾、武藤清栄⁵⁾、宗像恒次⁶⁾

¹⁾ 東京芸術大学、²⁾ 帝京大学、³⁾ 静岡産業大学、⁴⁾ 大阪市立大学、
⁵⁾ 東京メンタルヘルス、⁶⁾ 筑波大学名誉教授



本学会では、福島県に在住する住民の方々のストレスとメンタルヘルス調査を実施し、効果的なメンタルヘルス支援を提案することを目的とした調査委員会を発足した。本レポートでは、宗像恒次学会長による講演会が開催された久之浜地区の様子について報告する。

9月17日、いわき市久之浜公民館平成24年度前期市民講座「放射能に負けないための

育児教室」が開催された。本講演会はヘルスカウンセリング学会との共催で実施され、当日は2名のカウンセラーにご協力いただいた。また、当日は地元のボランティア（「アクション」、「FVN 福島ボランティアネットワーク」など5団体）の方々16名の協力を得て、会場の設定や運営に協力いただいた。会場には、親子が参加しやすいよう託児所を設け、個別カウンセリングのための相談室も設けた。講演会は予定時間を上回る盛況ぶりであった。講演会資料を大事に持ち帰る参加者の姿が印象的であった。

講演会終了後は、門馬公民館館長とボランティアの方々の案内で被災地を周った。今年8月に再開したばかりの「道の駅よつくら港」をはじめ、甚大な被害を受けた薄磯・豊間を周った。がれきの山が続く海岸線、ひと気のない砂浜、時間が止まったままの旧校舎。そうした一つひとつの現実が胸に訴えてきた。写真や映像では決して伝わらない現実のすさまじさを肌で感じた。

次に、講演会の開始前に実施した質問紙調査のうち自由記述の一部を紹介する。なお、本調査の第一報については第18回学術大会にて報告した。

・「1年6カ月過ぎ、少しは自分の中で落ち着き、この現実を受け入れ、前へ一步一步進んでいるのだと思い考えていました。自宅を修理し生活を始めましたが、暗い海や、誰も住んでいないこわれた住居やコンクリートの土台をみて毎日、心が苦しい時もあり、昨年の事について話を聞かせてほしいなどと言われると、話しをされていて、時々涙が流れる事もあり、不安定なのかと思います。放射線量は0.11ぐらいなのでとは思いますが、心

配もあります。家族 4 人で生活している事で、どうにか外出ができる様になった。(いわき市久之浜, 52 歳主婦) 」

- ・「放射能の影響については分かりませんが、この土地から他に行くことは考えていません。分からない中で今後も生きてゆくつもりでいます。実家は津波で流されてしまい、実母は現在一緒に住んでいます。自分の家や土地の行く末を案じながら、体力、気力がおとろえていく日々を少しづらく感じています。(いわき市小名浜, 54 歳)」



久之浜町 海沿いの住宅地跡

今回は調査と講演会が主であったが、今後は地元のボランティアの方々と交流を図り、つながりを大切にした継続的な活動をすすめていきたい。

最後に、講演会の開催にあたり多大なご尽力をいただいた久之浜公民館館長門馬英明氏、熊谷乃理子先生 (Nomade~s) に心より感謝申し上げます。